

「吶喊」原序

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

わたしは年若い頃、いろいろの夢を作つて来たが、あとではあらかた忘れてしまい惜しいとも思わなかつた。いわゆる回憶おもいでというものは人を喜ばせるものだが、時にまた、人をして寂寞せきばくたらしむるを免れないもので、精神たましいの縷糸いとが己すでに逝ける淋しき時世になお引かれていますのはどういふわけか。わたしはまるきり忘れることの出来ないのが苦しい。このまるきり忘れることの出来ない一部分が今、「呐喊」となつて現われた来由わけである。

わたしは、四年あまり、いつもいつも——ほとんど毎日、質屋と薬屋の間を往復した。年齢としごろは忘れたが、つまり薬屋の櫃台デスクがわたしの脊長せたけと同じ高さで、質屋のそれは、ほとんど倍増しの高さであつた。わたしは一倍も高い櫃台デスクの外から著物きものや簪かんざしを差出し、侮さげす蔑みの中に銭を受取り、今度は脊長せたけと同じ櫃台デスクの前へ行つて、長わずらいの父のために薬を買つた。処方を出した医者はいとも名高き先生で、所用の薬は奇妙キテレツのものであつたから、家へ帰ると、またほかのことで急がしかつた。寒中の蘆の根、三年の霜を経た甘蔗つが、番つが離れぬ一對の蟋蟀きりぎりす、実を結んだ平地の木……多くはなかなか手に入れ難いもので、それでもいいが、父の病は日一日と重くなり、遂に甲斐なく死亡した。

誰でも瘦世帯やせよたいの中に育つた者は、全く、困り切つてしまうことはあるまい。わたしは

思う。この道筋に在る者は大概他人の真面目を見出すことが出来る。わたしはN地に行つてK学校に入るつもりだ。とにかく変つた道筋に出て、変つた方面に遁れ、縁もゆかりもない人に手頼ろうと思う。母親はわたしのために八円の旅費を作つて、お前の好きにしまさいと言つたが、さすがに泣いた。これは全く情理中の事である。というのは、当時は讀書して科挙の試験に應じるのが正しい道筋で、いわゆる洋学を学ぶ者は、路なき道に入る人で、靈魂を幽霊に売渡し、人一倍も疎んぜられ排斥されると思つたからである。まして彼女は自分の倅に逢うことも出来なくなるのだ。しかしわたしはそんなことを顧慮してゐられる場合でないから、遂にN地に行つてK学堂に入った。この学校に来てからわたしは初めて世の中に別に物理、数学、地理、歴史、凶画、体操などがあることを知つた。生理学は教えられなかつたが、木版刷の全体新論や科学衛生論というようなものを見て、前の漢方医の議論や処方进行を想い出し、比較してみると、支那医者は有意無意の差こそはあれ、皆一種の騙者であることがわかつた。同時にだまされた病人と彼の家族に対し、盛んなる同情を喚び起し、また翻譯書に依つて日本の維新が西洋医学に端を発したことさえも知つた。

この何ほどの幼稚な知識に因つて、わたしの学籍は、後々日本のある田舎の医学専門

学校に置かれることになった。わたしの夢ははなはだ円まどかであった。卒業したら国へ帰って、父のように誤診された病人の苦しみを救い、戦争の時には軍医となり、一方には国人の維新に対する信仰を促進すべく準備した。微生物の教授法は現在どれほど進歩したかしらんが、つまりその時は映画を用いて微生物の形状をうつし出し、それに拠って講義をするのであるが、時に一段落を告げ、時間がなおりあまる時には、風景画や時事の写真を挿込んで学生に見せた。ちょうど日露戦争の頃でもあるから、自然戦争に関する画面が多かった。わたしは講堂の中で、同窓の学生が拍手喝采するのに引ずられて、いつも喜んで見ていた。ところが一度画面の上に久し振りでたくさんの中国人に出逢った。一人は真中に縛られ、大勢の者が左右に立っていた。いずれもガツチリした体格ではあるが、気の抜けたような顔をしていた。解説に拠ると、縛られているのは、露ロシア西亜のために軍事探偵を働き、日本軍にとらわれ、ちようど今、首を切られて示みせしめ衆しゆとなるどころである。困んでいるのは、その示みせしめ衆しゆの盛せい拳きよを賞しょう鑑かんする人達である。

この学年が済まぬうちにわたしはもう東京へ来てしまった。あのことがあってから、医学は決して重要なものでないと悟った。およそ愚劣な国民は体格がいかに健全であっても、いかに屈強であつても、全く無意義の見世物の材料になるか、あるいはその観客になるだ

けのことである。病死の多少は不幸と極まりきったものではない。だからわたしどもの第一要件は、彼等の精神を改変するにあるので、しかもいい方に改変するのだ。わたしはその時当然文芸を推した。そこで文芸運動の提唱を計り、東京の留学生を見ると多くは法政、理化を学び、警察、工業に渡る者さえ少くないが、文芸、美術を学ぶ者ははなはだ少い。この冷やかな空気の中に、幸い幾人かの同志を捜し出し、その他必要の幾人かを駆り集め、相談の後第一歩として当然雑誌を出すことにした。表題は「新しき生命」という意味を採った。われわれは当時大抵復古の傾向を帯びていたから、これを「新生」といったわけである。

「新生」出版の期日が近づいた時、最初に隠れたのは原稿担当者、続いて逃げたのは資本であった。結果は一銭の値打ちもない三人だけが残った。創始の時がすでに時勢に背いたので、失敗の時は話にもならない、しかも三人はその後各自の運命に駆逐され、一緒になつて将来の好き夢を十分に語ることもさえ出来ない。これがすなわちわたしどもの生産せざる「新生」の結末であった。

わたしがかつて経験したことのない退屈を感じたのは、それから先きのことである。初めはそのわけが解らなかつたが後になつて思うと、凡て一人の主張は、賛成を得れば前進

を促し、反対を得れば奮闘を促す、ところが爰（ここ）に生人（せいじん）の中に叫んで生人の反響なく、賛成もなければ反対もないと極（きま）つてみれば、身を無際限の荒原に置くが如く手出しのしようがない。これこそどのような悲哀であろうか、わたしがそこに感じたのは寂寞である。

この寂寞は一日々々と長大して大毒蛇のように遂にわたしの靈魂に絡みついた。

そうして自ら取止めのない悲哀を持ちながらムカ腹を立てずにいた。経験は反省を引起し、自分をよく見なおした。すなわち自分は、腕を振つて一度（ひとたび）叫べば応える者が雲の如く集る英雄ではないと知った。

さはいえわたしは自分の寂寞を駆除しなければならぬ。それは自分としてはあまりに苦しい。そこで種々（いろいろ）方法を考え、自分の靈魂（たましい）を麻醉し去り、我をして国民（うんち）の中に沈入せしめ、我をして古代の方へ返らしめた。その後も更に淋しいことや更に悲しいことがいろいろあったが、みなわたしの想い出したくないことばかりで、出来るなら自分の脳髓と一緒に泥の中に埋没してしまいたいことばかりであった。ではあるが、わたしの麻醉法はこの時すでに功を奏して、もはや再び若き日の慷慨（こうがい）激越（げきえつ）がなくなった。

S 会館の内に三間（みま）の部屋がある。言い伝えに拠ると、そのむかし中庭の槐樹（えんじゆ）の上に首

を縊つて死んだ女が一人あつた。現在槐樹は高くなつて攀じのぼることも出来ないが、部屋には人の移り住む者が無い。長い間、わたしはこの部屋の中に住んで古碑を書き写していた。滞在中尋ねて来る人も稀れで、古碑の中にはいかなる問題にもいかなる主義にもぶつかることはない。わたしの命はたしかに暗の中に消え去りそうだったが、これこそわたしの唯一のねがいだ。夏の夜は蚊が多かつた。蒲団扇を動かして槐樹の下に坐り、茂り葉の隙間から、あの一つ一つの青空を見ていると、晩手の槐蚕がいつもひいやりの頸首の上に落ちる。その時たまたま話しに来た人は、昔馴染の金心異という人で、手に提げた折鞆を破れ机の上に置き、長衫を脱ぎ捨て、わたしの真前に坐した。犬を恐れるせいでもあろう。心臓がまだ跳つている。

「あなたはこんなものを写して何にするんです」

ある晩彼はわたしの古碑の鈔本をめぐつて見て、研究的の質問を發した。

「何にするんでもない」

「そんならこれを写すのはどういう考ですか」

「どういう考もない」

「あなたは少し文章を作つてみる気になりませんか」

わたしは彼の心持がよくわかった。彼等はちやうど「新青年」を経営していたのだが、その時賛成してくれる人もなければ、反対してくれる人もないらしい。思うに彼等は寂寞を感じているのかもしれない。

「たとえば一間の鉄部屋があつて、どこにも窓がなく、どうしても壊すことが出来ないで、内に大勢熟睡しているとすると、久しからずして皆悶死するだろうが、彼等は昏睡から死滅に入つて死の悲哀を感じない。現在君が大声あげて喚び起すと、目の覚めかかった幾人は驚き立つであろうが、この不幸なる少数者は救い戻しようのない臨終の苦しみを受けるのである。君はそれでも彼等を起し得たと思ふのか」

と、わたしはただこう言つてみた。すると彼は

「そうして幾人は已に起き上つた。君が著手ちやくしゆしなければ、この鉄部屋の希望を壊したといわれても仕方がない」

そうだ。わたしにはわたしだけの確信がある。けれど希望を説く段になると、彼を塗りつぶすことは出来ない、というのは希望は将来にあるもので、決してわたしの「必ず無い」の証明をもつて、彼のいわゆる「あるだろう」を征服することは出来ない。そこでわたしは彼に応じて、遂に文章を作つた。それがすなわち最初的一篇「狂人日記」である。一度

出してみると引込んでいることが出来なくなり、それから先きは友達の囑たのみに応じていつも小説のような文章を書き、積り積つて十余篇に及んだ。

わたし自身としては今はもう、痛切に言の必要を感じるわけでもないが、やはりまだあの頃の寂寞の悲哀を忘れることが出来ないのだから、だから時としてはなお幾声か呐喊とつかんの声を上げて、あの寂寞の中に馳かけ廻る猛士を慰め、彼等をして思いのままに前進せしめたい。わたしの喊声は勇猛であり、悲哀であり、いやなところも可笑しいところもあるだろうが、そんなことをいちいち考えている暇はない。しかしまた呐喊と定めきた上は、大将の命令を聴くのが当然だから、わたしは往々曲筆を慈めぐんでやらぬことがある。「藥」の瑜ゆ兒じの墳墓の上にわけもなく花環を添えてみたり、また「明 日」みょうにちの中では、単たん四し嫂そうし子は終に子供の夢を見なかつたという工合には書かなかつた。それは時の主將が消極を主張しなかつたからである。自分としてはただ、自分の若い時と同じく現在楽しい夢を作る青年達に、あの寂寞の苦しみを伝染させたくないのだ。

こんな風に説明すると、芸術に対するわたしのこの小説の距離の遠さがよくわかる。そうして今もなお小説という名前を頂戴し、いつそ有難いことには集成の機会さえある。これはどうあつても福の神が舞い込んだといわなければならぬ。福の神が舞い込んだことは

自分にははなはだ氣遣いだが、しかし短い人生に読者があるということは、結局愉快なことである。だからわたしは遂に自分の短篇を掻き集めて印刷に附し、上述の次第で「呐喊」となづけた。

一九二二年十二月三日

北京において魯迅しるす

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の書き換えをおこないました。

「貴郎↓あなた 或る・或↓ある 或は↓あるいは 一々↓いちいち 所謂↓いわゆる
於て↓おいて 凡そ↓およそ 曾て↓かつて (て) 呉れ↓(て) くれ 此↓この 流石
↓さすが 而も↓しかも (て) 仕舞↓(て) しま 即ち↓すなわち 其処↓そこ 其↓
その 沢山↓たくさん 慥か↓たしか 只↓ただ 偶々↓たまたま 為↓ため 丁度↓ち
ようど 兎に角↓とにかく 猶お・尚お・仍お↓なお 中々↓なかなか 甚だ↓はなはだ
程↓ほど 殆ど↓ほとんど 況して↓まして 又↓また 未だ↓まだ 丸切り↓まるき
り 以て↓もって」

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

※底本の表題は「原序」ですが、全集内の「呐喊」の冒頭にあるため、通例にならない「呐喊」原序」とあらためました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（荒木恵一）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2008年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「呐喊」原序

魯迅

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>